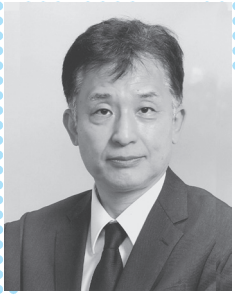
福井県小学校長会

會報

2025年度
No.121

発行日：令和７年８月 21 日
発　行：福井県小学校長会
編　集：県小学校長会編集広報委員会
印刷所：株式会社宮本印刷

海外から見た日本の小学校教育



福井県小学校長会
会長　松　宮　龍　栄

「６歳児は世界のどこでも同じようだけれど、１２歳になる頃には日本の子どもは“日本人”になっている。」この言葉は、山崎エマ監督作品の映画『小学校～それは小さな社会～ THE MAKING OF A JAPANESE』のキャッチフレーズです。このキャッチフレーズが示すように、日本の小学校教育は「小さな社会」として機能し、単なる知識伝達を超えた人間形成の場となっているということが、海外の国々で注目を集めています。

この映画は、杉並区の公立小学校の日常を追ったドキュメンタリー映画ですが、海外からの視点を通じて、私たちが当たり前だと思っている日本の教育システムの特殊性と価値、課題について改めて気づかせてくれます。６～１２歳という重要な時期の集団生活が社会性の育成につながっていること、給食当番・係活動等による自主性が責任感の醸成につながっていること、行事を通じた協働体験や困難を乗り越える体験が協調性の習得や忍耐力・継続力の育成につながっていること、掃除や整理・整頓の日常化が生活習慣の定着につながっていることなどが海外では驚きをもって受け止められており、このようなことが日本の集団性、協調性の高さを支える土台となっていると考えられています。

つまり、日本の教育では、集団での責任・役割・貢献を教え、その後に個人を育てるという「集団→個人」のアプローチを取っているのに対し、欧米の教育では「個人→集団」というアプローチを取っているという根本的な違いがあります。この映画がヒットした教育大国であるフィンランドでは、個人主義が行き過ぎて「自分のことしか考えない子どもが増えた」というような課題を抱える中、この日本の教育が「コミュニティ作りの教科書」と言われ注目されています。このように日本のシステムを称賛する他国がある一方で、当事者がその価値に気づいていないのはあまりにももったいないことです。

また、協調性が行き過ぎた場合の弊害としての同調圧力や、集団重視による才能の見落としなどの個性の軽視、行事準備での過労・ストレスなどの過度な負担、全国統一的な教育による多様性の欠如による画一化などの課題があるということも知っておく必要があります。教育は社会を作るものであり、継続的な改善と議論が必要です。このように、海外からの視点を通して「学校という場所の役割」を改めて考えてみる、また、伝統的価値観とグローバル化や多様性の尊重との調和を図りながら教育の質を向上させていくなど、子どもたち一人一人が幸せになれる教育システムを構築していくことが求められています。

そのためには、「小学校でどんな力を育てるのか」「核となる力とは何なのか」ということを改めて見つめ直し、不易の部分を明確にして、今の時代に対応できる学校経営につなげていくことが大切です。教育も地方分権の時代ともいわれていますが、これらの課題に取り組みながら、本県独自の教育を創り上げていく県校長会であり続けるために、県内校長１８０名全員で、力を合わせて取り組んでいきたいと考えます。

最後になりましたが「會報」の発行に際し、ご協力いただいた関係各位、並びに編集広報委員の皆様に心から感謝申し上げ、挨拶といたします。

第77回福井県小学校長学校運営研究大会 坂井大会 教育長祝辞

福井県教育長　藤　丸　伸　和　氏

令和７年度福井県小学校長「学校運営研究大会坂井大会」が、こうして盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。また、本日お集まりの小学校長会の皆様には、日頃から本県の教育力向上のために、多大なるご尽力をいただき、厚くお礼申し上げます。

私が昨年５月に教育長に就任して約１年間、様々な取組みをさせていただきました。少しずつですが学校現場の雰囲気も明るく前向きに変わってきたようにも感じます。これもひとえに皆様のご理解・ご協力の賜物です。この場をお借りして改めて感謝を申し上げます。

さて、昨年１０月に「教育に関する大綱」を改定し、また３月末に新たな「教育振興基本計画」を策定しました。今年度からは、新たな計画に基づき、「子どもが主役の教育」を全力で進めたいと考えています。そのためには、「教職員一人ひとりを大切にする働き方改革」のさらなる推進が必要です。

今年度、特にお願いしたいことを大きく３点お伝えします。

１点目は「風通しの良い職場づくり」です。まずは、学校運営の基本中の基本ですが、若手から中堅、ベテランまで自由闊達に意見が言える環境づくりに取り組んでください。

皆様におかれては、率先して教職員に声かけをしたり、様々な形で懇親の場を設けたり、１on１ミーティングのように日頃の悩みを打ち明ける機会を設けたり、若手中心のプロジェクトチームをつくったり、色々と工夫をしながら、教職員の「心理的安全性」を確保しつつ、前向きに学校運営について意見を述べ合える「健全で良好な関係」が築けるよう努めてください。こうした関係づくりが不祥事の未然防止にもつながると思います。

学校業務改善につきましては、今年度は特に、校長ＯＢ４名を「学校経営アドバイザー」として委嘱し、皆様の良き相談相手となるよう学校訪問などを行う予定です。また、文科省の委託を受けた「株式会社先生の幸せ研究所」と連携し、校内の全教職員を対象としたワークショップの運営や業務改善に向けた合意形成なども、専門家派遣によりサポートします。こうした「アウトリーチ型」の支援制度も積極的に活用しながら、「風通しの良い職場づくり」に取り組んでください。

２点目は「チャレンジを楽しむ教職員の育成」です。昨年度初めて、教職員の創意工夫を顕彰する「ふくい教育チャレンジアワード」を開催しました。「学びを引き出す部門」と「働きやすさ向上部門」に８１件の応募があり、応募された全員に「チャレンジアワードスピリッツ賞」を送りました。８１件の中から８００名を超える教職員の投票により２０件が入賞し、３月１９日にプレゼン発表を行い、こちらも参加者の相互投票により最優秀賞２件、優秀賞４件を決定し、表彰状を授与しました。教職員が日頃から実践されている創意工夫を「見える化」し、優れた取組みについては横展開を図るとともに、教職員の「働きがい」と「チャレンジする気持ち」を高める試みです。引き続き、教職員の授業改善や業務改善の取組みを全力で応援します。

皆様には教職員の意欲を引き出す声かけや、活躍できる機会の提供、提案があった場合にはその実行を決断するリーダーシップの発揮など、多くの役割が期待されます。「ふくい教育チャレンジアワード」への応募も念頭に、教職員の「チャレンジを引き出すマネジメント」に一層心がけてください。「風通しの良い職場づくり」と「チャレンジを楽しむ教職員の育成」の２つの観点から、「働きやすさ」と「働きがい」の両立を図り、現在７４％の教職員のウェルビーイング意識のさらなる向上につなげていただくことを期待します。

最後に、３点目として、男性教員の育児休業についてお伝えします。男性の育休取得率は、令和４年度が２１．３％、５年度が約３５．６％でしたが、昨年度は６０．７％と大幅に増加しました。ただし、小学校においては４４．１％に留まっています。代替教員の確保という課題はありますが、配偶者が最も大変な時に「一緒に子育てをする」体験は、子どもへの愛情やパートナーへの感謝の気持ちが高まり、その後の働き方に大きな影響を与えます。また、児童生徒や保護者へのかかわりにも必ず良い変化をもたらします。

本県は全国に先駆け「男性教員の育休１００％」を達成したいと考えています。周囲への気兼ねなどから迷っている男性教員に、皆様から積極的にお声かけをいただき、「誰もが当たり前に共家事・共育てをする福井県」に変えていけるよう、ご理解・ご協力をお願いします。

以上３点お伝えしました。これらの取組みが、皆様の後に続く教員志望者を増やすことにも必ずつながると思います。引き続きのご理解・ご協力を心からお願いします。

結びになりますが、福井県小学校長会の益々のご発展と、本日お集りの皆様のご活躍とご健勝を祈念して、祝辞といたします。

令和７年度 福井県小学校長会 活動方針

福井県小学校長会は、結成以来、本県の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を積み重ねるとともに教育諸条件の整備・充実に努め、多大な成果をあげてきた。

今、現代社会は、急速なデジタル化（Society5.0）やグローバル化が進展する一方、人口減少・少子高齢化や家庭・社会における人間関係の希薄化、貧困問題、さらには、自然災害や紛争による価値観の揺らぎといった課題に直面している。この変化の激しい不確実性の時代の中で、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の実現が目指されている。このような中、小学校教育には、正解のない課題に立ち向かい、自立した人間として多様な人々と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力の育成が求められている。本県においても「一人ひとりの個性が輝く、ふくいの未来を担う人づくり」の基本理念のもと、子どもが主役の「夢と希望」「ふくい愛」を育む教育を推し進めていかなければならない。

こうした中で、学校は、持続可能な社会の担い手を育成するために、個別最適な学びと協働的な学びにより「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力や人間性等」の三つの力をバランスよく育む教育を実現し、新たな価値を創造し、社会を生き抜く力を身につけた子どもを育てていかなければならない。そのため校長には、明確なビジョンを掲げ、学校組織の活性化を図り、創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善に努めることが求められている。また、ふるさとふくいの風土に根付いた教育文化のよいところを継承しつつ、子どもに知的好奇心をもって学びを深める「探究力」、変化に向き合い多様な他者と協働する「共感力」・「対話力」、課題を解決し新たな価値を生み出す「創造力」を育成し、地域と関わり、より深く学び、自らの可能性に挑戦していく「生きる力」を家庭や地域との連携・協働のもとで推し進めていかなければならない。

さらに、「ＧＩＧＡスクール構想」の推進、いじめ・不登校への対応、特別支援教育の充実、学校教育への信頼を一層高いものにするための教職員の資質・能力の向上、学びの専門職としての「働きやすさ」と「働きがい」の両立など、対応すべき重要課題が山積している。加えて、近年、激甚化している自然災害や、不祥事、理不尽な要求等へのリスクマネジメントやクライシスマネジメントも求められる。

また、小学校教育の充実・改善を図っていくための、カリキュラム・オーバーロードの視点からの学習指導要領の見直し、少人数学級のより一層の推進や教科担任制の導入による持ち授業時数の縮減、教職員定数の改善や人的措置の充実も喫緊の課題となっている。

よって、校長は、このような状況を深く認識し、教育改革の動向を的確に把握した上で、リーダーシップを発揮し、確かな計画と実行力を持って教育成果をあげていかなければならない。私たちは、組織の総力をあげて課題解決に努めるとともに、積極的に施策提言を進めることで、県民・国民の信頼に応える必要がある。そのために、校長は自らの使命を自覚し、志高く学び続け、権限と責任のもとに、未来社会を創造する力を身につけた日本人の育成を志向して、活力ある学校、信頼に応える学校づくりに努めなければならない。

以上の方針をふまえ、本年度は次の活動を重点的に推進する。

本年度の活動の重点

1　学校経営の充実
2　研究活動の充実
3　創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善
4　教職員の資質・能力の向上
5　教職員の定数や処遇の改善、働き方改革の推進

これらの活動を推進するために、東海・北陸地区及び全国連合小学校長会との連携を一層密にして組織活動の充実に努めるとともに、関係諸機関・団体とも連携し、小学校教育に対する正しい世論の喚起に努める。

主な委員会と活動事項

本年度の活動方針に基づき、本会の事業遂行のために次の専門委員会及び特別委員会を設置し、事業を推進する。

1　専門委員会

◇人事行財政対策委員会

義務教育費国庫負担制度の堅持、教職員の基礎定数及び加配定数の拡充、ICTを活用した教育の推進のための専門職員の配置促進、教科担任制の導入による教員の持ち時間数の削減、少人数学級の拡大を目指す学級編制基準見直しの促進、退職時の処遇の充実、働き方改革等のための対策・要請活動を行う。

◇調査研究委員会

今日の学校教育の課題や学校経営上の諸問題について調査研究し、対策に資する。

◇教育研究委員会

研究主題を設定し、研究活動の推進及び教育研究大会の企画推進を行う。

◇編集広報委員会

「會報」の発行とホームページの更新により、情報の提供、成果の報告等を行う。

2　特別委員会

必要に応じて設置する。

令和７年度

専門委員会活動計画

人事行財政対策委員会

（要望活動・人対資料）

４月１７日	○第１回専門委員会 （第１回小学校人対委員会） 正・副委員長選出、活動方針・内容について協議等
４月	○県教委と日程・話題等の連絡調整
５月	○第１回幹部会 ・ミライ会議の持ち方、当日の運営全般について
６月	○全校長対象のアンケートを実施し、話題の集約・分析 ○第2回幹部会 ・ミライ会議の話題について ○第１回小中合同人対委員会
７月	○第１回準備委員会 ・当日の運営および話題等の最終協議
８月	○第２回準備委員会 ・話題、提言等について
８月２８日	○「ふくい教育ミライ会議」
１０月	○全連小人事対策研究協議会参加 （委員長）
１１月	○「ふくい教育ミライ会議」報告
２月	○会務報告

調査研究委員会

（実態調査・調査報告）（全連小調査）

４月１９日	○第１回専門委員会 正・副委員長選出、年間事業計画の作成 調査テーマ、内容（項目）について
５月　上旬	○調査内容についての会員の希望調査 郡市ごとに希望調査、全体の集計
５月２９日	○第２回専門委員会 調査研究項目・内容の決定 調査方法・集計方法について
６月　上旬	○各郡市において調査の実施、集計
７月　上旬	○各郡市調査研究委員会 担当項目の考察作成
８月　下旬	調査結果の分析、考察検討 調査研究報告書の原稿作成
９月　上旬	原稿検討、調査結果分析、考察 （正・副委員長）
１０月	○全連小調査研究協議会参加（委員長）
１０月　下旬	○報告書のデータ配信（校長会ＨＰ） 県教委、地教委等へ報告書配付
１２月　上旬	○調査研究概要報告 各郡市調査研究委員が概要報告
１月　中旬	○本年度活動のまとめ（アンケート）

教育研究委員会

（研究推進）（全国大会・東陸大会）

４月１７日	○第１回専門委員会 正・副委員長選出、事業計画案確認 県、東陸・全国教育研究大会について
５月	○全連小・東陸三重大会参加申込
６月１７日	○第２回専門委員会 （メールでの資料配付と確認） 県教育研究南越大会の当日の運営・役割分担について
８月２０日	○県小学校長教育研究南越大会 福井型８分科会で郡市発表、研究協議
１０月　９日 ～１０日	○東陸三重大会 １３分科会・全体会・記念講演
１０月１６日 ～１７日	○全連小福岡大会 １３分科会・全体会
１月　中旬	○第３回専門委員会 県教育研究南越大会の反省等 令和８年度各研究大会の概要 令和８年度東陸福井大会に向けて

編集広報委員会

（會報発行・ＨＰ更新）

４月１７日	○第１回専門委員会 正副委員長選出、活動方針 各郡市原稿割当の確認・決定等 「會報」編集計画
５月上旬	○「會報」１２１号原稿依頼 県教委・校長講話執筆者・新任校長への依頼 ○ＨＰ更新①
６月３０日	○全連小広報担当者連絡協議会 （委員長）
７月１０日	○一次校正締切
８月　１日	○第１回編集企画会議（正副委員長） 二次校正・編集作業
８月　６日	○第２回専門委員会 「會報」１２２号企画・原稿依頼計画
８月２１日	○「會報」１２１号発行
９月　上旬	○「會報」１２２号原稿依頼 ○ＨＰ更新②
１１月１３日	○一次校正締切
１２月１２日	○第２回編集企画会議（正副委員長） 二次校正・編集作業
１月１６日	○第３回専門委員会 ○「會報」１２２号発行
２月	○ＨＰ更新③

校　長　講　話

小学校での出会いから

〈福井市〉一乗小学校長
宮　本　正　三

今の自分があるのは子どものころに通っていた小学校の先生との出会いがあったからだと強く思っています。教員になって中学校勤務一筋できましたが、初めての小学校勤務は管理職になってからです。実は小学校勤務は避けたいと思いながら今日まできています。その理由は子どもの頃の自分と似たような小学生に出会ったら面倒だと思ったからです。自分が小学生の時、多くの人に多くの迷惑をかけたことが明確に記憶に残っています。そんな面倒な子がいたら指導するのにも大変な目に合ってしまう…。それ以上に、その子を全否定してしまうかも。しかし、その頃に出会った先生はそうではありませんでした。たくさん叱られたのは間違いありませんが。

小学生の頃の先生とのやりとりで特に記憶に残ることが３つあります。１つ目は決して日頃の行いが良くなかった自分が校内体育大会の応援団長に選ばれたとき先生が黙ってうなずいてくれたこと。その後、連体の応援団員も任されました。２つ目は算数のテストで不思議な解き方をしたのか答えをどのように出したのか説明を求められ、それをうなずきながら聞いてくれたこと。その解き方を理解しようと熱心に聞いてくれました。３つ目は連音の合奏練習で勝手にフレーズを作って吹いていたら呼び出され、怒られると思っていたら発表でも吹くように言われたこと。

小学生の記憶（思い出ではない）はまだまだありますが、１つ思うことは、当時の先生は自分を否定することはなく、むしろ、認めてくれていたと思っています。この頃のことがあったからこそ、自らを否定することなく過ごすことができ、さらに、小学校で出会った音楽が今の自分やこれまでの人生に大きな影響を与えてくれたのだったと思います。

教員として３８年目に入りましたが、子どもたちが変わるきっかけが、毎日の生活のどこかにあるはずだと思いながら、今も仕事に向かっています。子どもを一人の人間として認め、その後の人生において自信をもって歩ませる、そう、その子が人生を歩んでいける土台をつくることに、小学校の先生は関わっているのです。先生の子どもたちに対するかかわりがその子の人生を左右する可能性があると思っています。ぜひ、そのような目で見ながら、目の前にいる子どもたちと関わっていきましょう。

小学校での出会い

育てよう、3匹のカエル

〈福井市〉国見小学校長
名　葉　浩　行

「〇〇がえる」のお話をします。でも、生き物のカエルではありません。

まず、１つめの「かえる」は、「かんがえる」です。

普段から、じっくり考えて行動していますか。人間の頭の中は、「どうしてだろう。」「なぜなんだろう。」と考えれば考えるほど、過去に習ったことがどんどんつながっていき、「あっ、なるほど、こうなるのか。」と、思うようになります。だから、いろんな場面でじっくり考えて、自分なりの答えを見付けたり、友達と話し合って新しい考えを見付けたりするとよいですね。

また、相手の気持ちを考えることも大事です。自分の行動によって、「相手はうれしい気持ちになるのかな。」「嫌な気持ちになるのかな。」「どう思うのかな。」を一人一人がしっかり考えられるようになりましょう。そうすることで、国見小学校が目指す児童像の「進んで考える子」「思いやりのある子」になれるのです。

２つめの「かえる」は、「まちがえる」です。

間違えると恥ずかしいので、発表をためらったことはありませんか。でも、間違えると、その時は恥ずかしいけれど、「正しいことは何だろう。」「どうすればよかったのか。」と知りたくなるから、反対にできるようになるのです。

電球を発明した有名なエジソンも、電球を光らせる実験を１万回もしたと言われています。実験を失敗しても、「この方法では、電球は光らないという発見をしたのだ。それは間違いじゃなくて、その方法ではうまくいかないことがわかったのだから、正しいことに近づいたのだ。」と言っています。間違いを次に生かしています。皆さんも間違えることを怖がらないで、間違えたことから、正しいことを学ぶようにしましょう。

３つめの「かえる」は、「ふりかえる」です。

「国見っ子の振り返りのポイント」は知っていますね。授業の終わりにこれを意識して振り返りをしていると思います。

学習の終わりに、「くらべて気づいたこと」「にがてなところ、わからなかったこと」「みんなの意見を聞いて考えが変わったこと」「のびたところ、できたところ」「これから生かしたいこと」などを振り返ると、自分が成長していることやこれからやってみたいことが分かります。だから、勉強がもっと楽しくなるし、できるようにもなるのです。

この「かんがえる」「まちがえる」「ふりかえる」という３つの「かえる」を意識しながら学校生活を送っていきましょう。

失敗や間違いは大切

〈大野市〉有終東小学校長
竹　内　由　美

失敗や間違いは大切、これは、何度かお話していますね。今日は、私の失敗のお話をします。

私は、大野市の下庄小学校の出身です。そのころ、全校の児童数は、大体７００人くらいいたと思います。

私が、小学校３年生の冬、もうすぐ卒業式、というころです。全校児童が講堂に集まって、卒業式の歌の練習をしていました。校歌の練習をしていたとき、前で指導をしていた先生が、こうおっしゃいました。

「校歌の１番のでだしを覚えている人はいますか。」

すると、たくさんの子どもが手を挙げました。私も、さっと手を挙げました。その中から、名前を呼ばれた一人が、みんなの前に出て、校歌の１番のでだしを正しく答えることができました。

次にまた、先生は、こうおっしゃいました。

「校歌の２番のでだしを覚えている人はいますか。」

私は、さっきより勢いよく、さっと手を挙げました。すると今度は、手を挙げた人は、私以外、誰もいませんでした。

先生は、私の名前を呼びました。私は、いすから立って、前にいらっしゃる先生の方に向かって歩き始めました。ところが、どうしても、校歌の２番の歌詞が思い出せないのです。もしかしたら、元から覚えていなかったのかもしれません。

だんだん、先生が近づきます。先生から、マイクを向けられて、か細い声で、私はこう言いました。

「手を挙げたのではなく、頭を掻いていたのです。」

この時、先生から怒られたわけでもないし、このあと、友達から何か言われた記憶もありません。たぶん、私の周りの人たちは、このことをすぐに忘れてしまったのでしょう。でも、あれから５０年たっても、私には忘れることのできない、苦い思い出です。

そして、この思い出をみなさんに聞いてもらいたかったのです。

みなさんは、学校でいろんなことをします。それは、うまくいくこともあるし、うまくいかないこともあります。もしかしたら、うまくいかないことの方が多いかもしれません。でも、無駄なことは、一つもありません。それらはチャレンジした証拠であり、大切な経験なのです。そして、それらすべてが、自分という人間をかたちづくっていくのです。

今日から１０月です。１０月も失敗を恐れずに、いろんなことにチャレンジして、今よりもっと、たくましい東っ子になれるよう、みんなでがんばりましょう。

校内マラソン大会 ～それぞれの開会式にて～

〈南条郡〉南条小学校長
田　原　美　和

＜１，２年生＞

今日はマラソン大会です。マラソンは長い距離を走ります。こども園にはない、小学生になったから行われる行事です。業間のときに私も一緒に走って、目標をもって走るみなさんの姿を目にしました。とてもうれしく、頼もしく感じ、マラソン大会が楽しみになりました。今日は、もう一度、自分の目標を確かめて力一杯走りきりましょう。人に負けないこともよい目標ですが、自分に負けないことを一番の目標にしましょう。

＜３，４年生＞

３年生は昨年より距離が長くなりました。練習していると、「つらいな」「苦しいな」と思うことが増えたのではないでしょうか。私はマラソンが苦手です。けれども、業間のときに目標をもって一生懸命に走るみなさんの姿を見て、すてきだなと思いました。がんばるみなさんの姿を見て、私もがんばろうと思えました。全力でがんばることは、一緒にやっている人に元気と勇気を与えてくれるのですね。３，４年生のみなさんには、今日もそのような走りをしてほしいと願っています。

＜５，６年生＞

今日、５年生は昨年より長い距離を走ります。６年生は、小学校最後のマラソン大会になりました。高学年のみなさんには、絶対に南条小学校のマラソン大会を成功させてほしいのです。これは、１年生から４年生までには話さなかったことです。高学年のみなさんだからこそ、伝えていることです。では、どうすることが「成功」なのでしょうか。

６年生、みなさんの背中を５年生が見ています。追いかけます。全員に５年生より速く走ることを求めているのではありません。一人一人が真剣に、自分の目標に向かって懸命に走るその姿を見せてほしいのです。５年生、そんな６年生の姿を見て思いを受け取り、ついていき、できれば追いつき、追い越す走りを見せてほしいのです。苦しいでしょう。辛いでしょう。全力で頑張っているのですから。

そして、５年生には自然教室のとき、６年生には先日の修学旅行のときに、それぞれ私から話した、「がんばろう！」「ファイト！」「もう少し！」など、聞いた人ががんばろうと思えるすてきな声かけをしようではありませんか。みなさんが作り上げる高学年のマラソン大会の雰囲気、姿は不思議と低中学年にも伝わり、「学校の雰囲気」になっていくのです。

さあ、まもなくスタートです。

新任校長の言葉

校長としての第一歩

〈福井市〉湊小学校長　上田　祥子

校長としての立場で見る学校はこれまでとは異なり、常に何らかの緊張感があります。毎日、明るく元気な子ども達からたくさんのエネルギーをもらい、学校生活を送ることができています。

この役職に就いてから、「信頼関係の大切さ」や「信頼して任せることの意義」を意識するようになりました。職員同士、保護者と学校、地域と学校、あるいは子ども同士は互いの信頼関係があってこそ、人はつながりをもち協働してものごとを遂行していけるようになるのだと考えるようになったからです。今後、様々な場面におけるつながりを大切にした学校運営を、心がけていきたいと考えています。

また、学校を取り巻く環境は刻々とめまぐるしい変化を遂げています。状況をよく見極め、子ども達も私達教員も、いろいろなことに挑戦する機会を利用し、経験を通して学んでいけたらと考えています。「先生が主体的・対話的で深い学びを続けている学校は、子どもも同じような姿になる」という言葉を耳にしたことがあります。校内研究や現職教育の活性化こそ、子ども達の自ら学ぶ姿につながるのだと思っています。

現在、職員の研修を多く設けたり、校外研修への参加を促したりしています。職員を信頼し、必要に応じて声かけ等を行い、校長として成すべきことを誠実に成し遂げ、保護者や地域から信頼される学校づくりに努めたいと考えています。

命を支えられて気づいたこと ～校長として歩む今～

〈吉田郡〉御陵小学校長　稲葉　雄治

２年前の秋、学校行事の準備をしていた際、ステージから後ろ向きに転落しました。気づいたときには左脚が全く動かず、救急車で大学病院へ搬送されました。診断は左骨盤骨折。手術とリハビリを経て、５５日間の入院となりました。後に聞いた話ですが、骨盤の骨折は、大出血を伴う可能性もあり、命を失う危険もあったとのことです。手術室に向かう場面は、今でも鮮明に覚えています。まるでドラマの一場面のようでした。手術後の麻酔が切れたあとの激しい痛みは２週間以上も続き、眠れない日々が続きました。

大学病院の医師の先生方、看護師の皆さん、さまざまなスタッフの方々、そして家族の支えがあって、無事に職場復帰し、現在では後遺症もほとんど残らないまでに回復することができました。

入院生活を経験したことで、私の価値観は大きく変わりました。家族の支えがなければ働くことができないこと。働けるということは大きな喜びであること。学校において教職員の安全を確保することの重要性に気づかされました。

今、私は入院していた福井大学医学部附属病院から最も近い御陵小学校の校長を務めています。通勤途中に病院の建物が目に入るたびに、こうして校長として働けていることが不思議でなりません。皆さんに助けていただいたこの命を、子どもたちや先生方の笑顔のために、捧げたいと心から思います。

怪我をしたことで、多くの人に支えられて自分が生きていることに気づけました。まさに「怪我の功名」です。この思いを、子どもたちにも伝えていきたいと思います。そして、スクールプランでも目標としている「明日が楽しみな学校」を、これからもつくっていきたいです。

家から町から学校から

〈勝山市〉鹿谷小学校長　中村　明子

「校長先生は、みんなからどんな先生だと思われたいですか。」

国語の授業で校長室を訪ねてきた５年生の児童からのインタビューでした。４月からすでに２カ月近く経った頃でしたが、みんなからのみんなとは…、校長として何をすべきか…などと考えると、うまく言葉が返せませんでした。

児童が校長室を去った後、校長室にかかっている書の文字「あけぼの」が目に入りました。本校PTAが長年取り組んできたあけぼの運動のことです。挨拶ができる子、けじめのある子、ボランティアができる子、のびやかな子の頭文字をとって「あけぼの」。毎月の生活の目標と関連していたり、朝ボランティアの時間が設定されていたり、PTAの挨拶運動週間があったりなど、子どもたちの中にも深く根付いています。「家から町から学校から」のあけぼの運動。子どもたちの質問の答えは、ここにありました。

子どもたちや教職員みんなが、笑顔で学び続ける学校にすること、その学校を保護者や地域の方々とつなげていくこと、子どもたちや教職員、学校の姿を地域の方々に見える形で返していくこと、それが、校長としてやるべきことであることに気付かされました。子どもたちからの大切な学びでした。

「家から町から学校から」。児童玄関上に大きく掲げられているその言葉は、校長としてすべきことはなんだろう、と自分を奮起させ、時には、日々模索している自分を励ます大切な言葉になっています。

学校再編を控えて

〈越前町〉織田小学校長　松村　康彦

少子化に伴い、全国で学校再編が進められています。越前町も同様で、令和７年度に小学校が８校から６校に再編されました。更に８年度には、私が赴任した織田小学校と隣接する萩野小学校が再編され、織田小が萩野小の児童を迎え入れる予定です。

この織田小・萩野小再編に向けて、令和６年度から学校再編準備委員会が定期的に開催されています。町教委事務局や学識経験者、地区住民代表、保護者代表、学校関係者が、協議内容に合わせて出席しています。私は今年度の４月から学校再編準備委員会に出席していますが、出席する度に再編に関わる学校の校長としての責任の重さを痛感します。歴史ある萩野小を閉じ、児童を織田小へ送り出す保護者や地区住民、学校関係者の期待や不安、哀感等をひしひしと感じるからです。

このような状況下、私は、萩野小の児童・保護者・地区住民に最大限の配慮をしつつ再編準備をするようにと教職員へ指示しています。特に、再編前に行われる交流学習の計画・運営・総括に関しては、入念に行わせています。学年単位で行う場合には、個と個の交流を十分に深める、学校全体で行う場合には学校の文化・雰囲気等を伝えることができるようにしています。また、再編後の教育内容の充実に向けた準備も始めています。再編により校区が広がり、自然・文化・歴史・産業・人等の教育資源が増えます。これらを有効に活用できるカリキュラムを編成していきます。

今回の再編は少子化に伴うものですが、本校に集う子どもたちの学びの場や学習内容の再構築の機会とポジティブにとらえ、再編してよかったと思っていただける学校をつくることが、この時期に校長として赴任した私の責務だと肝に銘じています。

子どもたちのために

〈越前市〉吉野小学校長　白木　直子

校長となり、最終決定者であるということをひしひしと感じる毎日です。体育大会はまさに天気とにらめっこ。「午前中は曇り、午後から雨、いや雨が早まるかも・・・」という予報。いろいろなところから情報を集め、教頭と相談し、最終的には私が「なんとかできるでしょう。やりましょう。」と判断し決行。小雨は降ったものの、無事行うことができ、結果とても素晴らしい体育大会になりました。

校長室には、教職員、地域の方、教育関係者、企業の方など、毎日いろいろな人が相談やお願いに来ます。悩むけれど、みんなのためにという気持ちで前向きに考えて対応しています。失敗すれば落ち込み、うまくいったときには、安堵の気持ちで満たされます。

「スクールプランを実現するための手立てを考え実行する。」「１つ１つの言動に責任を持ち、納得のいく解決方法を見極め、児童、教職員がよりよい学校生活を送れるように考える。」こんな毎日は、１日があっという間に過ぎていきます。頭の中で、いろいろなことが同時進行で回っていて、抜けていることはないかとメモを見ながら確認の日々です。

毎日何もない日はなく、本当に大変です。しかし、職員、仲間、先輩に助けられてなんとか頑張っています。そして何より、私の元気の源は子どもたちの笑顔です。毎朝校門に立って、全校の子どもたちに「おはよう」と挨拶をすると、元気な挨拶が返ってきます。日中教室を見回ると、子どもたちが生き生きと学んでいる姿が見られます。休み時間には「校長先生」と話しかけてきてくれます。子どもたちの笑顔が私に喜びを与えてくれます。私は、子どもたちのために、校長として私のできることを精一杯やっていきたいと思っています。

迷　走　中

〈敦賀市〉中央小学校長　瞿曇　俊雄

校長になり、３ヶ月が過ぎました。子どもたち、職員、保護者、地域などに対してどんなことをすればよいのか迷っている日々が続いています。私は、教務主任、教頭を合わせて１０年近くやってきているので、校長と話す機会は多くあったはずです。しかし、その頃は、自分のことしか頭になく、校長がどのようなことを考え、実践しているのか分からず、また、全く気にもしていませんでした。

ふりかえってみると、教務主任、教頭時代に校長にいろいろな提案をすると、どの校長も「いいよ。やってみよう。ありがとう。」とにこやかに言ってくださいました。おかげで、自分のやろうとすることに自信を持つことができ、次はこれをやってみたいという気持ちにさせられました。これがまさに働き方改革でよく話題になる「働きがい」にあたるのだろうと思います。

今、自分は校長として何ができるのか迷走中ですが、とりあえず、自分が今まで出会った校長にしていただいてうれしかったこと、充実感が得られたことを、そのままやってみようと思っています。

山本五十六の言葉に「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ。」というものがあります。この言葉は「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。」「やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」と続きます。「やってみせ…」は、現在の職場では職員同士が本当によくやってくれています。校長としては「話し合い…」と「やっている…」の２つを心がけ、育て、実らせたいと考えています。今は、この２つの言葉を常に意識しながらの行動となりますが、意識せずに自然にできるように日々精進を重ねたいと思います。

編集後記

この度、「會報」121 号を発行する運びとなりました。お忙しい中、貴重な原稿をお寄せいただき、深く感謝申し上げます。県小学校長会では、「會報」をはじめ、HP でも活動内容等を発信しております。令和７年度も「會報」や HP が、校長として職責を果たす一助となりましたら幸いです。